

会議名称:全学教育推進機構 自己点検・評価委員会
 日時:令和8年6月29日(月)審議期限
 場所:メール審議

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況		<p>応用基礎レベルに対応したプログラムは「AI・データサイエンス入門」(1年次配当)と「データサイエンス基礎」(2年次配当)で構成され、2025年度入学生より適用される。2025年度に「AI・データサイエンス入門」を履修した1年次704名のうち、単位を修得したのは587名で、成績の分布は秀:24%、優:29%、良:22%、可:8%、不可:17%となった。</p> <p>なお、同科目はリテラシーレベルの構成科目でもあり、2022年度の新設以来、履修者数は445名→714名→627名と推移し、2025年度は1038名と増加、うち832名が単位を修得している。</p> <p>2026年度前期に開講する「データサイエンス基礎」の履修者750名のうち、471名(62.8%)が2年次で、そのうち166名(35.2%)が2026年度前期に新たに本プログラムの履修者となった。上記の704名と併せて現在のプログラム履修者総数は870名となっている。(4月22日時点の数字であり、本学が定める履修取消制度の適用を受け、数値が変動する可能性がある)</p>
学修成果		<p>まず、全学年を対象とした学修成果として、合格者の平均点と成績分布を比較すると、2025年度に合格となった学生の平均点は81.7点で、成績の分布は、秀:21%、優:27%、良:23%、可:9%、不可:20%となり、昨年度の数値(平均点は79.7点、秀:15%、優:24%、良:21%、可:14%、不可:26%)と比べて上位の成績に学生がシフトしており、この結果から毎年の授業改善に基づき学修成果は上がっているといえる。</p> <p>次に、本プログラムの対象となる1年次704名の成績分布(秀:24%、優:29%、良:22%、可:8%、不可:17%)と全学年の成績分布(秀:21%、優:27%、良:23%、可:9%、不可:20%)を比べたとき、前者の方が上位の成績を占める割合が高いことから対象学生においても高い学修成果があったと推測できる。また、全受講生を対象とした授業改善アンケートにおける質問、「この授業を通じて、知識が深まった、能力が高まったと感じますか」という項目については、192名の回答中「そう思う、どちらかと言えばそう思う」は174名となっており、高い評価を得ることができたものと考えられる。</p>
学生アンケート等を通じた学生の 内容の理解度		<p>前述のとおり、授業後に学生に対して実施したアンケート調査の質問、「この授業を通じて、知識が深まった、能力が高まったと感じますか」という項目について、高い評価を得ることができたものと考えられる。また、「この授業に意欲的にとりくみましたか?」という質問に対しては、「そう思う、どちらかと言えばそう思う」の回答は170名となり、こちらについても高い評価を得ることができたと考えられる。これらに加え成績の分布状況についても加味すると、本プログラムの合格者は、真剣に授業に取り組み、学びに十分に集中し、理解を深めたことができたものと考えられる。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等 他の学生への推奨度		<p>2025年度「AI・データサイエンス入門」受講生1038名を対象に、「後輩など他の学生へのこの科目の推奨度」と「その理由」をたずねるアンケート(回答任意)を実施した。前者は5段階のリッカート尺度、後者は自由記述である。総回答数は649件であり、この科目の履修を「勧める」の43.8%、「やや勧める」の39.7%を合わせると、全体の約83%が肯定的評価を示した。否定的回答は、「やや勧めない」が1.7%、「勧めない」が0.9%にとどまり(残りは「どちらともいえない」)、全体として本科目の推奨度は非常に高い。また、自由記述の分析からは、主な推奨理由として、第一にAIやデータサイエンス、Excel、プログラミングなど将来に直結する実践的知識・技能が身につくといった点が多く見られた。第二に、オンデマンド形式により自分のペースで受講できる柔軟性が高く評価されていた。第三に、解説や資料が分かりやすく、復習がしやすいといった教材への肯定的意見も多かった。一方で、自己管理が求められることや内容がやや難しいという指摘も少数ながら見られた。学年別では、全体的に上級生ほど有用性を実感する傾向がうかがえた。「勧める」の割合を学部別に見ると、理工学部が53.1%、マネジメント創造学部が52.0%、経営学部と法学部が50.0%、知能情報学部が46.2%と強い肯定的傾向を示し、理系・文系といった学問分野の違いは見られなかった。その他の学部でも、文学部、フロンティアサイエンス学部では「やや勧める」が50%以上であり、否定的評価は限定的であった。総じて、本授業は学部横断的に推奨度が高く、実用性と学習形態の柔軟性がその主因であると考えられる。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況</p>	<p>応用基礎レベルに対応したプログラムは「AI・データサイエンス入門」(1年次配当)と「データサイエンス基礎」(2年次配当)で構成されるが、リテラシーレベルの構成科目でもある「AI・データサイエンス入門」の2025年度の履修者数は、昨年度の約1.6倍増の1038名と増加した。このうち応用基礎レベルの対象となる1年次履修者数が704名、履修率は9%と当初の想定よりも高い数字になった。リテラシーレベル申請時の初年度履修率が6%(445名)であったことを加味すると、毎年の履修率向上に向けた取り組みが実を結んだと考えられる。また、生成AIの発展により、AIやデータサイエンスは今は生活の一部となっており学生の関心も高いため、今後の履修者数の増加、履修率向上に向けた計画は順調に進むものと考えられる。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
<p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p>	<p>数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)プログラム履修者550名が2026年3月に初めて卒業し、就職率は99.5%(4月9日時点)となっている。大学全体の就職率98.7%(4月1日時点)と比べても高い数値となっており、このことから企業等から評価を得ていることがわかる。次に、プログラム修了者の就職先の業種について、卒業生550名のうち16.4%にあたる90名が情報処理系の職種として就職したが、そのうち20%の学生はメーカーや金融、商社など、情報通信業以外の業種に就職をしていることから、数理・データサイエンス・AI教育は、業界を問わず企業等から必要となっていることが推測される。応用基礎レベルに対応したプログラムでは、リテラシーレベルでの学修を土台とし、数理・データサイエンス・AIを活用して課題を解決するための実践的な能力の育成が目的となっており、同プログラム修了者の社会での一層の活躍が期待できる。</p>
<p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>本学では、卒業生が就職している企業に対して、定期的に「企業アンケート」を実施している。この企業アンケートに数理・データサイエンス・AIの項目を追加することを決定した。本学卒業生におけるこれらの知識やスキル獲得状況について意見を聴取することで、これまで以上に産業界からのニーズや意見を把握することができるようになる。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>本授業では、「学ぶ楽しさ」を、概念だけではなく実習による体験を通じて学生に提供する。また、「学ぶことの意義」を、机上の空論にとどまらず、身近な事例によるデータサイエンスの有用性を感じ取ることができる題材を通じて学生に提供する。このため、本プログラムでは、教材や取り上げる内容について継続的に見直しを行い、可能な範囲で最新の話題やトレンドに沿った題材を取り入れ、学生からのアンケート結果も参考に内容に調整を加える。これにより、学生にとって身近な題材がデータサイエンスの視点を通してどのように捉えられるかを、体験的に学ぶことができる授業を目指す。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>応用基礎レベルに対応したプログラムの構成科目の一つである「AI・データサイエンス入門」では毎年、授業改善アンケートの結果に基づきリテラシーレベルの自己点検・評価を行い、授業内容についての見直しと改善を行い、内容・水準を維持・向上しつつ、より「わかりやすい」授業となるように努めている。教育改善における試行的な取り組みについても積極的に実践しており、一例として、SchoolSwing(https://dx.schoo.jp/)というシステムの活用が挙げられる。これにより、学生の動画視聴ログを取り学習活動を可視化することで、学習者が動画を通じた学びに実際にどのように取り組んでいるのかを知り講義動画の改善に役立てるなどの取り組みを行った。他方、モデルカリキュラムの改訂もすでに授業内容に盛り込み、社会の変化を踏まえた教育内容の見直しも行っている。今後も自己点検・評価を行いながら、学習者にとってより「分かりやすい」授業になるようにPDCAサイクルを回していく。</p>